

新規選定① ^{ちゅうもんづくり}中門造の民家が建ち並ぶ南会津地方の農村集落

^{みなみあいづまちなまえざわ}**南会津町前沢伝統的建造物群保存地区**

所在地 ^{まえざわ}南会津町前沢の各一部

面積 約13.3ヘクタール

南会津町は、福島県南会津郡の最南に位置し、前沢は町南端の^{たていわ}舘岩地域に立地する山村集落であり、舘岩川の西岸に集落地を開く。

前沢村は、古絵図と伝承から、近世初期には成立していたとされ、江戸時代には、^{みなみやま}南山御蔵入地と呼ばれる天領に属していた。19世紀初頭編纂の『新編会津風土記』は、村内に13軒の家と鹿島神社、薬師堂、^{ぜんたくじ}前沢寺があったと伝える。

明治40年の大火で、家屋のほとんどが焼失したが、この大火後、数年のうちに復興されたのが現在の集落で、主屋13棟の再建及び2棟の新築は、南会津地方及び新潟地方の大工13人によりなされたと伝わる。

保存地区は、舘岩川、山林、前沢入沢で囲まれる区域を中心とした東西約540メートル、南北約600メートル、面積約13.3ヘクタールの範囲である。

保存地区内には、東西と南北の古道が交わり、この辻を中心に家屋が建ち、その周囲を細かな地割の畑地が取り巻く。

伝統的な主屋は茅葺で、^{ちゅうもんづくり}中門造若しくは^{すごや}直屋である。中門造の主屋は、母屋を^{よせむねづくり}寄棟造、中門を^{きりづまづくり}切妻造とするのが基本で、母屋の棟を南北に置き、南側を上手とし、下手に中門を突き出すものが多い。軒高を高くし、壁面は柱や梁、束、密に通した貫を化粧とし、華やかな木組を見せるのが特徴で、直屋も同様の特徴を示す。

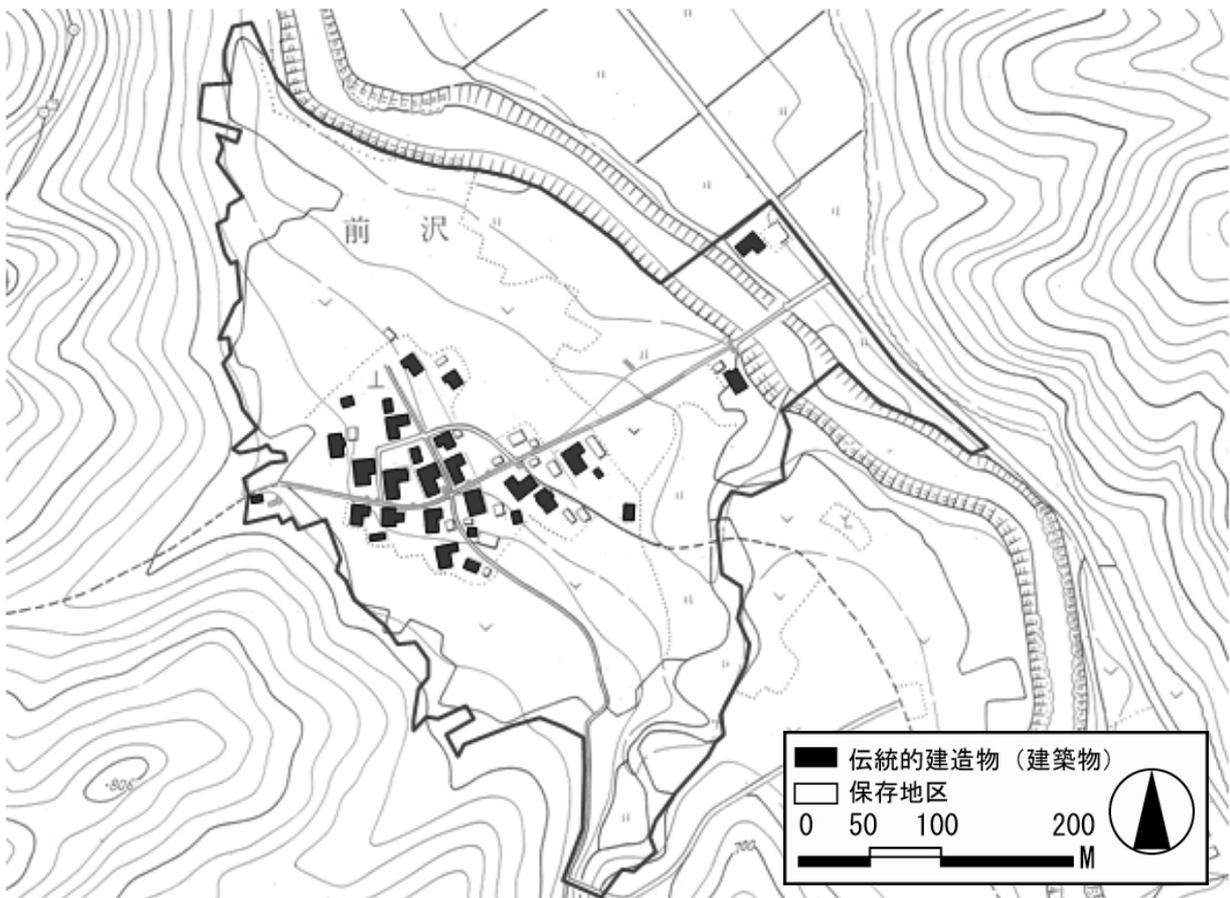
南会津町前沢伝統的建造物群保存地区には、明治末期から昭和前期に建てられた中門造と直屋の茅葺民家が混在して建ち、これらの建築群が周辺の耕地、山林、河川等と共に、会津地方南部の雪深い山間部に独特な農村集落の歴史的風致を形成し、我が国にとって価値が高い。



前沢の集落



前沢のちゅうもんづくり中門造



南会津町前沢伝統的建造物群保存地区の範囲

新規選定② 重厚な町家が建ち並ぶ伊那街道沿いの商家町

とよたしあすけ 豊田市足助伝統的建造物群保存地区

所在地 豊田市足助町西町、新町、本町、田町、蔵ノ前、山王及び石橋の全域並びに陣屋跡、落合、飯盛、天王、真弓、広畑、梶平、引陣、城山、岩崎、八万、後山、御所山及び今岡の各一部

面積 約21.5ヘクタール

豊田市は愛知県の三河地方西北部に位置し、足助は尾張、三河と南信濃を結ぶ伊那街道の道筋に当たり、古くから海と山を結ぶ物資の中継点として重要な位置を占めた。

足助の町の起源は明らかではないが、室町時代後期に現在の足助市街地を見下ろす真弓山に足助城が築かれ、この頃に原形となる町場が形成されたとみられる。

江戸時代の足助は、複雑に折れ曲がる伊那街道に沿って、田町、東町、新町、西町があり、北側の山麓に社寺や陣屋が立地していた。安永4年（1775）に町並みの大半を焼く大火があったが、その後も、街道沿いの商家町として発展し、近代になっても地域の中心として栄えた。

明治中期には新町と田町で、江戸時代の街路構成の一部が改変を受けたが、これらの道沿いにも町家が建ち、現在見る景観ができた。

保存地区は、東西約1,240メートル、南北約750メートル、面積約21.5ヘクタールの範囲で、伊那街道に沿った近世の足助の町と、近代になってできた町筋、街道北側の陣屋や社寺があった地域を含む。

町家は、ほとんどが安永の大火以降のもので、江戸時代のものが多く残る。主屋は塗籠で平入と妻入が混在し、近世後期から近代のものでは、間口の大きな一戸建を分け、長屋に改造したものもある。川沿いでは護岸上に二階建や三階建の離れ座敷が建ち並ぶ特徴的な景観も見られる。

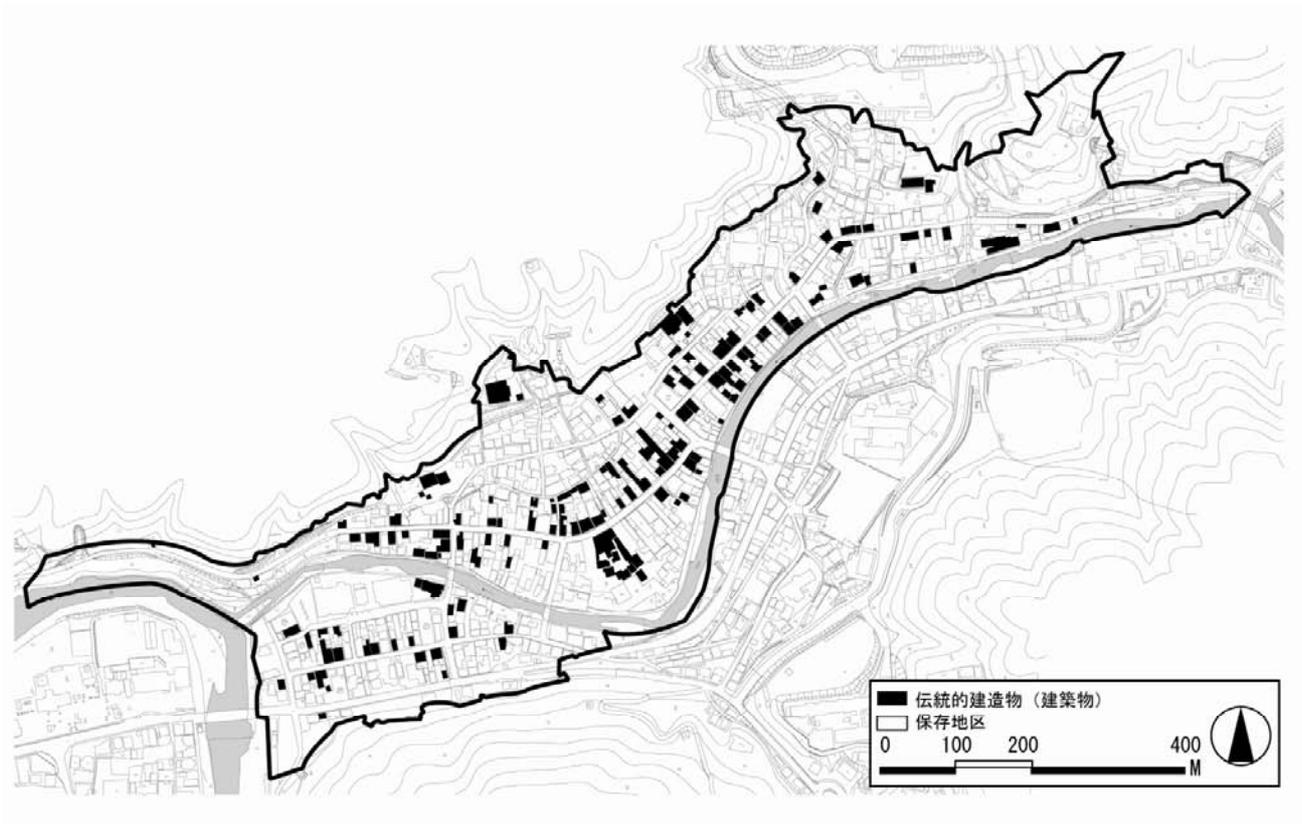
豊田市足助伝統的建造物群保存地区は、江戸時代以来の重厚な町家を多く残し、平入と妻入の入り交じる街道沿いと、離れ座敷の建ち並ぶ川沿いに変化に富んだ景観を残す。物資の流通によって近世から近代にかけて栄え、山間部に成立した商家町の姿を良く伝え、我が国にとって価値が高い。



いな
伊那街道沿いの町並み



足助川沿いの町並み



豊田市足助伝統的建造物群保存地区の範囲

新規選定③ 茅葺民家と棚田景観が残る萩往還沿いの宿場町

萩市佐々並市伝統的建造物群保存地区

所在地 萩市大字佐々並^{くどしいち}字久年市、字山田^{やまだ}、字上市^{かみいち}、字中市^{なかいち}及び字沖市^{おきいち}の全域並びに字前千持^{まえせんもち}、字前千持東側^{ひがしがわ}、字東千持^{ひがしせんもち}、字新道ヶ埜^{しんどうがたお}、字新田^{しんでん}、字犬鳴^{いいなぎ}、字竹ノ下^{たけのした}、字財徳^{ざいとく}、字大野^{おおの}、字中溝^{なかみぞ}、字台山^{だいやま}、字道祖ノ元^{どうそのもと}、字宮ノ埜^{みやのだお}及び字東板橋^{ひがしいたばし}の各一部

面積 約20.8ヘクタール

萩市は山口県北部、日本海側に位置する。佐々並市^{ささなみいち}の集落は、萩市街から南東へ約15キロメートル離れ、中国山地の山間を流れる佐々並川の南北両岸に広がる。

慶長9年（1604）、萩へ入城した毛利輝元^{てるもと}は、萩藩内の主要街道として、萩と瀬戸内海側の三田尻^{はぎおうかん}を結ぶ萩往還を整備した。佐々並市はこの時設置された宿駅の一つで、慶長年中には藩主が休泊する御茶屋^{おちやや}を起点に町並みが成立していたとみられる。

江戸時代の佐々並市は、往還沿いに茅葺の主屋が建ち並び、周辺には田畑が広がっていた。町並みには御茶屋とともに、上級藩士などが宿泊する御客屋^{おきやくや}や人馬継立てをおこなう目代所^{もくだいしょ}があり、江戸時代を通じて、萩藩の宿場町として維持された。

保存地区は、東西約850メートル、南北約1,420メートル、面積約20.8ヘクタールの範囲で、江戸時代の佐々並市全域と国史跡萩往還に沿った棚田を含む。

地区内には、幕末から近代にかけての茅葺や赤い石州瓦で葺かれた主屋が残り、萩往還に沿ってまとまりある町並みを形成している。町並みへ下る往還沿いには棚田の石垣が多く残り、山から集落に引かれた水路とともに、山間に立地する集落の独特な景観を形成している。

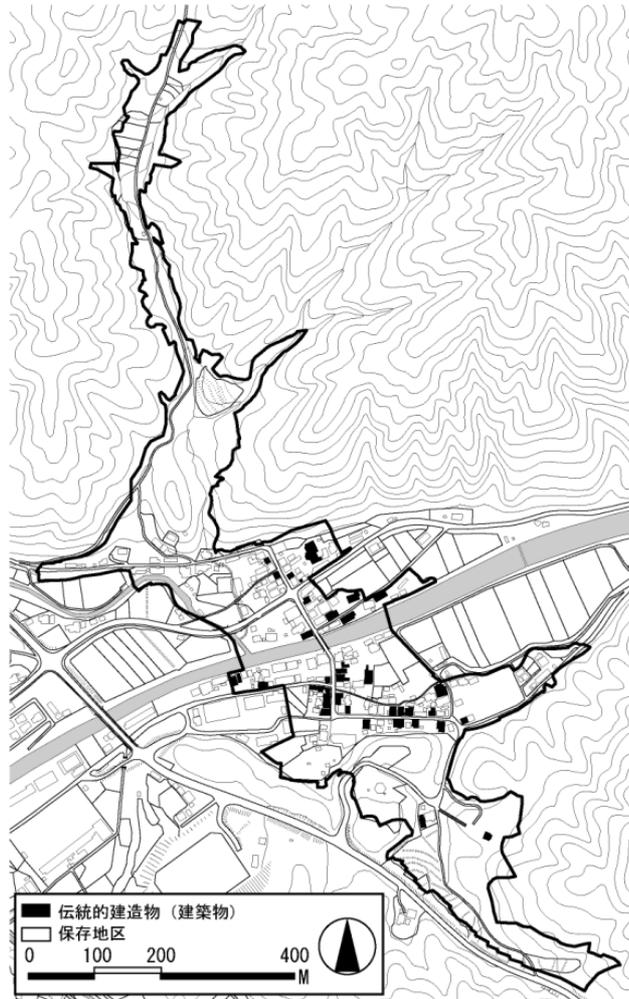
萩市佐々並市伝統的建造物群保存地区は、江戸時代の宿駅施設等が失われているものの、近世前期に御茶屋を起点として成立した町割が良く残り、往還沿いに混在して残る茅葺や棧瓦葺の主屋が周囲の棚田等と一体となって、萩藩の主要街道であった萩往還の宿場町としての歴史的風致を今日に良く伝え、我が国にとって価値が高い。



ささなみいち
佐々並市の町並み



はぎおうかん
萩往還沿いの石垣



萩市佐々並市伝統的建造物群保存地区の範囲